



Title	P. L. Travers : A Less Subversive Pragmaticis
Author(s)	三原, 京
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1995, 29, p. 45-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47806
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

P. L. Travers : A Less Subversive Pragmaticist

三 原 京

1. はじめに

Lewis Carroll の *Alice's Adventures in Wonderland* と *Through the Looking-Glass and What Alice Found There* (両者を以下『アリス』と略記) に意味論的・語用論的な不規則性が見られることは、よく知られている。しかしオーストラリア生まれのイギリスの作家 P. L. Travers が書いた *Mary Poppins*, *Mary Poppins Comes Back*, *Mary Poppins Opens the Door*, *Mary Poppins in the Park*, *Mary Poppins in Cherry Tree Lane*, *Mary Poppins and the House Next Door* (これら6作品を以下『メアリー・ポピンズ』と略記) が児童文学でありながら、他の本よりも意味論的・語用論的不規則性を含んでいることは、あまり知られていない。ところが作者 P. L. Travers が Lewis Carroll のファンだったせいか、『メアリー・ポピンズ』には『アリス』を連想させる部分が多い。言語学的に見ても、『アリス』とよく似た不規則性がある。しかし、それに加えて、『メアリー・ポピンズ』特有の語用論的ユニークさが見られることも事実である。そこで本稿では『メアリー・ポピンズ』に見られる意味論的不規則性や、語用論的に見て興味深い言語現象を考察してみようと思う。

まず『アリス』とよく似た意味論的・語用論的不規則性を、『アリス』と比較しながら考え、次に『メアリー・ポピンズ』特有の語用論的ユニー

クさを見ていく。そして『メアリー・ポピンズ』は『アリス』同様ナンセンスであり、語用論的に不規則であるが、『アリス』ほど破壊的 (subversive) ではないことを指摘したい。

2. 『アリス』との類似点

2.1. 地口 (pun) の頻出

『メアリー・ポピンズ』では、地口¹⁾が頻繁に現われる。地口は二つの意味を同時に持つという性質上、単語が指示物と対応して意味をなすわけではないので、言葉が外部から閉鎖されてしまう。『アリス』の世界がメタ言語化している理由の一つは、このような特質を持つ地口が『アリス』の中心的位置を占めているからである。言葉が外部から閉鎖されてしまうとコミュニケーションが正常に機能しないので、我々の世界では地口は単におかしさを出すためだけに使われるのが普通である。ところが『メアリー・ポピンズ』では『アリス』同様、地口が自然な会話として使われたり、何かの説明に使われることがよくある。(1)は説明に使われた例である。

- (1) But at last they came to St. Paul's Cathedral, which was built a long time ago by a man with a bird's name. Wren it was, That is why so many birds live near Sir Christopher Wren's Cathedral, which also belongs to St. Paul, and that is why the Bird Woman lives there, too. (*Mary Poppins* VII)

2.2. 固有名詞 (名前) が指示物 (referent) と意義 (sense) の両方を持つ

我々の世界では、普通名詞が指示物と意義の両方を持つのに対して、固有名詞 (名前) は指示物しか持たない。つまり、Baker という名前だからといってパン屋とは限らないし、Smith という名前だからといって鍛冶屋とは限らない。

ところが『アリス』のハンプティ・ダンプティ (Humpty Dumpty)

の名前が、指示物だけでなく「ずんぐりむっくり」という意義も持っているように、『メアリー・ポピンズ』では、固有名詞（名前）が指示物と意義の両方を持つことがある。例えばバンクス氏 (Mr. Banks) は銀行員であるが、bank には言うまでもなく「銀行」という意義がある。またブーム提督 (Admiral Boom) の boom には「帆桁」という意義があり、元海賊ビナクル (Binnacle) の binnacle には「羅針箱」という意義がある。さらに、毎月第二月曜日には何事もあべこべになるアーサー・ターヴィー (Arthur Turvy) の妻はトプシー・ターヴィー (Topsy Turvy) というが、topsy-turvy は「あべこべ」という意義を持つ。この場合には、さらなる落ちがついている。トプシー・ターヴィーは結婚前、トプシー・タートレット (Topsy Tartlet) という名前で、そのときはストレートの髪としゃがれ声をもつ陰気な女性だった。ところがトプシー・ターヴィーになると、カールの髪と甘い声をもつ陽気な女性になる。まさしく、あべこべ (topsy-turvy) になったわけである。

2.3. 協調の原理の違反

『メアリー・ポピンズ』では、Grice の協調の原理が守られないことがある。例えば(2)は、量の原則 (Do not make your contribution more informative than is required) と様態の第三原則 (Be brief) に違反している。なお、ここで質問しているのはネコ、答えているのは知識を得ることに夢中になっている博学の国王である。

(2) "... What is the strongest thing in the world?" ...

"The Tiger ... is a very strong thing. So also are the Horse and the Lion. Then, of course, there are the tides of the sea. And the granite veins of the mountains. Volcanoes, too, have a mighty strength and the snowy caps of ice at the Poles. Or, again, it might be the Wall of China —" (*Mary Poppins Opens the Door* III)

また、(3)では質の原則の廃棄 (abrogation of the Gricean maxim

of Quality) が見られる。

(3) “Well, you’ll get them [=horses] when the moon turns blue! That’s all I can say!” snapped Mr. Banks.

“How often does that happen?” Jane enquired.

Mr. Banks looked at her angrily. What stupid children I’ve got, he thought. Can’t understand a figure of speech! ...

[Jane and Michael rode peppermint horses.]

Then the moon rose, full and round and clear, above the trees of the Park. ...

“Oh, Michael! Look! It’s blue!” she [=Jane] cried.

And blue indeed it was. (*Mary Poppins Opens the Door* V)

第一下線部の表現は普通、「絶対手に入らない」という比喩的な意味で使われる。にもかかわらず、文字通り月は青くなり求めていたものは手に入ってしまう。これは『アリス』の “I’m not myself” の用法に似ている。アリスは自分が何者であるかという問題に直面し、普通比喩的に “I’m not behaving characteristically” という意味で使われる “I’m not myself” は “I’m a different entity from the one I used to be” という文字通りの意味を与えられる (*Alice’s Adventures in Wonderland* V)。ここでは、メタファーがメタファーとして機能せず、質の原則は役に立たない。

2.4. 会話の論理の消失

『メアリー・ポピンズ』では、対話者が自分のことばかり考えているために、会話の論理が見出だせない会話がある。(4)の場合、蝶々を捕まえることに夢中になっている動物園の番人は、Admiral を「アカタテハ」の意味、Cabbage を「モンシロチョウ」の意味で使っている。ところが公園番は、Admiral を自分の知人の「ブーム提督」と解釈し、Cabbage を自分の畑にある「キャベツ」の意味にとっている。したがって、この二人の会話に論理性を見出だすことはできない。

(4)... “I’m after an Admiral!”

“A n’Admiral? Well, you won’t find ’im in a laurel bush. ’E’s over there, at the end of the Lane. ...”

“I mean a *Red* Admiral!” hissed the Keeper of the Zoological Gardens.

“Well, ’e’s red enough for anything. ...”

“It’s not a man I’m after, I’m catching butterflies ... and all I’ve got ... is one Cabbage White.”

“Cabbage?” cried the Park Keeper, “If you want a cabbage, I’ve some in my garden. ...”

(*Mary Poppins in the Park* IV)

これは、次の『アリス』のアリスと白の女王との会話に似ている。

(5)... “You take some flour — ”

“Where do you pick the flower?”

“Well, it isn’t *picked* at all,” Alice explained: “it’s ground — ”

“How many acres of ground?” said the White Queen.

(*Through the Looking-Glass and What Alice Found There* IX)

ここで注目すべきことは、対話者はそれぞれ自分の筋を通してということである。「粉」と「ひく」、「花」と「土地」、「アカタテハ」と「モンシロチョウ」はそれぞれ縁語であり、また「ブーム提督」と「キャベツ」も、縁語ではないにしても共に公園番の生活圏から出てきた語である。したがって、対話者はある意味で外部から閉鎖されたような状態にある。これはナンセンスの世界特有の現象である。

2.5. 会話の含意の混乱

『メアリー・ポピンズ』では、会話の含意が混乱していることがある。

(6)... she[=Mrs. Corry] turned to Mary Poppins, whom she appeared to know very well — “I suppose you’ve all come for some Gingerbread?”

“That’s right, Mrs. Corry,” said Mary Poppins politely.

“Good. Have Fannie and Annie given you any?” ...

“No, Mother,” said Miss Fannie meekly.

“We were just going to, Mother —” began Miss Annie

... Then she[=Mrs. Corry] said in a soft, fierce, terrifying voice:

“Just going to? Oh, *indeed!* That is *very* interesting. And who,
may I ask, Annie, gave you permission to give away my gingerbread
—?”

“Nobody, Mother. And I didn't give it away. I only thought —”

(*Mary Poppins* VIII)

顔見知りのメアリー・ポピンズに「ジンジャー・パンを買いにきたんだろ
 うね」と尋ねた後で「ファニーとアニー（コリーおばさんの娘）があげた
 かね」と言えば、この発話文は「ファニーとアニーはジンジャー・パンを
 あげておくべきだ」ということを含意している。この後でアニーが「これ
 からです」と言ったのは、その含意をくみとったからである。ところがコ
 リーおばさんは、これを聞くと憤慨して「アニー、わたしのジンジャー・
 パンをあげちゃっていいと、だれがおまえに許したんだい」と、おそろし
 い声で言っている。ここでは会話の含意が完全に混乱している。『アリス』
 でも、このような場面がよく出てくる。

(7) “Have some wine,” the March Hare said

... “I don't see any wine,” she[=Alice] remarked.

“There isn't any,” said the March Hare.

(*Alice's Adventure's in Wonderland* VII)

2.6. まとめ

このように、『メアリー・ポピンズ』においては、協調の原理や会話の
 含意、会話の論理が役に立たないことがある。しかし『アリス』と違って
 丁寧さの原理はなんとか守られている。主人公メアリー・ポピンズは傲慢
 な人物として描かれてはいるが、『アリス』によく見られる相手の人格を
 傷つけるような無礼さはない。また『アリス』の “Jabberwocky” に見
 られるかばん語 (portmanteau word)²⁾ のような新語は出て来ず、ハ
 ンプティ・ダンプティのように “When I use a word... it means just

what I choose it to mean — neither more nor less.” (*Through the Looking-Glass and What Alice Found There* VI) と考える人物もいない。したがって、単語の解釈に苦勞することもない。

3. 『メアリー・ポピンズ』特有の点

3.1. 引喩 (allusion) の連発

『メアリー・ポピンズ』では引喩がよく使われるが、*Mary Poppins in the Park* V において、特にそれが顕著になる。例えば(8)は “A bird in the hand is worth two in the bush” のパロディー (parody) である。このような引喩の一種パロディーは、この章だけで5回、(9)のような純然たる引喩もこの章だけで6回出てくる。

(8) “Two birds in the bush are worth one in the hand,” said Mr. Mo, “I mean,” he added nervously, “they sing more sweetly when they are free! ...”

(9) What a terrible mistake I've made — married in haste to repent at leisure! But it's no good crying over spilt milk!

3.2. めずらしい比喩

『メアリー・ポピンズ』では、比喩がひじょうに多く使われるが、普通はめったに使わない比喩が出てくることがよくある。(10)は直喩、(11)は隠喩の例であるが、特に(10)は英米人でも理解しがたい。

(10) Quick as a needle, she [=Mary Poppins] grasped the handle [of the umbrella]. (*Mary Poppins in the Park* I)

(11) And off he [=Michael] dashed at her [=Jane's] heels.

“Don't expect *me* to keep up with you! I am not a centipede!”
[said Mary Poppins.]

(*Mary Poppins in the Park* II)

3.3. 風変わりな交錯的配語法 (chiasmus)

関係する二語を逆転した形で繰り返すレトリックを交錯的配語法というが、『メアリー・ポピンズ』ではこれが少し変わった形で使われている。

Mary Poppins IV のタイトルは Miss Lark's Andrew であり、ここでは Lark が人名、Andrew がペットの犬の名前として用いられている。ところが、*Mary Poppins Comes Back* II のタイトルは Miss Andrew's Lark であり、Andrew が人名、Lark はこの人が飼っている「ヒバリ」の意味で用いられている。つまり、飼い主とペットが逆転したわけである。

3.4. 多様なレトリックの頻出

『メアリー・ポピンズ』では、様々なレトリックが使われる。擬人法、誇張法だけでなく、(12)のような代換 (hypallage) や(13)のようなくびき語法 (zeugma)、さらに(14)のような語法違反 (solecismus) もある。

- (12) Each time he [=the angel in disguise] skipped his feet went higher, and the earth ... was falling away beneath him.

(*Mary Poppins in the Park* I)

- (13) "Let us ... offer a reward to the Professor who can teach the King a little wisdom! And if ... he has not succeeded, his head shall be cut off"

... the Professors kept on coming, and failing, and losing hope, and also their heads.

(*Mary Poppins Comes Back* VI)

- (14) "Who taught you these things, Majesty?"

"Him," said the King, ungrammatically.

(*Mary Poppins Comes Back* VI)

3.5. 同意語への言い換え

『メアリー・ポピンズ』では、ある単語を同じ意味の別の単語に言い換えている場面がある。bust と burst は、bust がより口語的、burst がより標準的という違いはあっても、意味は同じである。

- (15) "... I wonder you don't ask for the Moon, too!"

"But I did!" he [=Michael] reminded her [=Mary Poppins] reproachfully. "And I got it, too! But I squeezed it too tight and it bust!"

"Burst!" (*Mary Poppins Comes Back* VII)

4. まとめ

P. L. Travers の『メアリー・ポピンズ』は意味論的・語用論的不規則性を持つナンセンス・ファンタジーである。それは次の部分からもわかる。

- (16) It[=the Cat] is still wandering ... for Near and Far are alike to it. (*Mary Poppins Opens the Door* III)

(16)は主語的同一性による異質なものの同一化現象である。つまり「ヘレンは泣く」「ヘレンは笑う」ゆえに「泣くは笑う」というメタファーであり(丸山1987: 141)、ナンセンスの一種である。

しかし『メアリー・ポピンズ』は、『アリス』ほど不安感を与えない。『アリス』が協調の原理、会話の含意、丁寧さの原理の不規則性を呈しているのに対し、『メアリー・ポピンズ』は丁寧さの原理だけは守っているからである。また新語は出てこず、言葉に思い通りの意味を持たせようとする人物もいない。その一方で、多様なレトリックが実に多様な形で出てくる。したがって P. L. Travers は、Lewis Carroll に似てはいるものの、少し破壊力の劣る (less subversive) pragmaticist なのである。

注

- 1) OED の定義では, "The use of a word in such a way as to suggest two or more meanings or different associations, or the use of two or more words of the same or nearly the same sound with different meanings, so as to produce a humorous effect; a play on words" となっている。
- 2) Gardner (1970) は "portmanteau word" を "It has become a common phrase for words that are packed, like a suitcase, with more than one meaning" と説明している。例えば "slithy" は "lithe and slimy" という意味であり、1つの単語に2つの意味が入っている。

参考文献

- Gardner, M. (ed.) (1970) *The Annotated Alice*, Penguin Books.
- Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation," in Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41-58, Academic Press.
- 稲木昭子・沖田知子 (1991) 『アリスの英語』 研究社出版。
 _____ (1994) 『アリスの英語 2』 研究社出版。
- 石井慎二 (編) (1981) 『別冊宝島25レトリックの本』 JICC 出版局。
- Lakoff, R. T. (1993) "Lewis Carroll: Subversive Pragmaticist," *Pragmatics* 3: 4, 367-385.
- Leech, G. N. (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman.
- 丸山圭三郎 (1987) 『言葉と無意識』 講談社。
- 松浪有・池上嘉彦・今井邦彦 (編) (1983) 『大修館英語学事典』 大修館書店。

テキスト

- Carroll, L. (1865) *Alice's Adventures in Wonderland*, Puffin Books.
 _____ (1872) *Through the Looking-Glass and What Alice Found There*, Puffin Books.
- Travers, P. L. (1934) *Mary Poppins*, Lions.
 _____ (1935) *Mary Poppins Comes Back*, Lions.
 _____ (1944) *Mary Poppins Opens the Door*, Lions.
 _____ (1962) *Mary Poppins in the Park*, Lions.
 _____ (1982) *Mary Poppins in Cherry Tree Lane*, Lions.
 _____ (1988) *Mary Poppins and the House Next Door*,
 Lions.

(大学院後期課程学生)